

<特集：図書館新時代> 多文化社会図書館サービスとは：デンマークの例

著者	吉田 右子
著者別名	Yoshida Yuko
雑誌名	月刊言語
巻	37
号	9
ページ	54-57
発行年	2008-09
URL	http://hdl.handle.net/2241/118862

多文化社会図書館サービスとは

—デンマークの例

吉田右子（よしだ ゆづこ）

北欧において、公共図書館はコミュニティの学習と文化の中心に位置づけられている。住民にとって図書館はコミュニティにおいて最もなじみのある文化施設であり、日常生活の中に深く根づいている。

ところで北欧では、戦後、移民・難民を受け入れてきた経緯があり、多様な民族的・文化的背景を持つ住民が、コミュニティの人口構成の中に一定の比率を占めている。こうした現状を踏まえ移民を中心としたマイノリティ住民に対する図書館サービスが、近年、公共図書館の重

要な課題となっている。

従来、マイノリティ利用者へのサービスは、特別のニーズを持つ利用者へのサービスとして位置づけられていた。しかしながら文化的に多様な背景を持った利用者が増加するにつれ、マイノリティへのサービスは、公共図書館における利用ニーズや資料収集に関わる図書館全体の問題として、とらえられるようになってきた。今や北欧の図書館サービスの展開において、マイノリティ利用者へのサービスは重要な柱である。本コラムでは、デンマークにおけるマイノリティ利用者へ

のサービスの現在の状況を紹介し、北欧の公共図書館が目指す多文化社会図書館サービスの方向性を明らかにしたい。

●デンマーク公共図書館のマイノリティ・サービス

デンマークは北欧の中でも最も成熟した図書館制度を持つ国であり、ムーネと呼ばれる行政区域のすべてに公共図書館が設置されている。公共図書館におけるマイノリティへのサービスは当初、移民への母語資料の収集・提供を目的に約四〇年前に開始された。現在は母語資料の収集・提供、デンマーク語を学習するための資料の収集・提供、文化交流プログラムなど多岐にわたるサービスが提供されている。

以下、マイノリティ住民の比率が高い公共図書館における、多文化図書館サービスの実践例を紹介する。

《事例1 ヘルシンガー公共図書館》

ヘルシンガーは人口約三万五千人のデンマーク有数の観光都市で、マイノリティの比率が高い。マイノリティ住民のための資料として、図書、新聞、雑誌、トリーキングブック、音楽CD、ビデオが用意されている。またデンマーク語学習資料も揃っている。

デンマークではすべての公共図書館において、無料でインターネットを利用することができ、ヘルシンガー公共図書館でも、マイノリティ住民に対するコンピュータ利用支援に力を入れ、少人数向けのコンピュータ講座を開設している。

また福祉、教育、文化・娯楽情報について信頼度の高いリンク集を提供している。

マイノリティ住民への特色あるサービスを実施しているのは、イスラム系住民が多く住むヴァナゴー児童図書館である。ここでは、「カフェ・オーブンドア」

と称するプログラムが週に一回開催されている。司書がデンマーク語の読み書きが困難な子供たちの宿題の支援を行うほか、日常生活に必要な文書をデンマーク語に翻訳するサービスを通じて移民の生活支援を行う。このプロジェクトはデンマーク図書館局と難民・移民・統合省の補助を受けており、今後、同種のプログラムを全国に拡張する計画がある。この分館の常連であるイスラム系の少女たちにとつて、図書館は家庭、学校以外の第三の場所として重要な役割を果たしている。

《事例2 オーデンセ公共図書館》

オーデンセはデンマークの第三の都市であり、やはりマイノリティが多く住んでいる。図書館は母語資料、デンマーク語学習資料の提供に加え、マイノリティ住民を対象としたワークショップを実施している。

ワークショップは「新聞を読みあう」と名づけられた、十五回のプログラムから構成されている。社会的に孤立し、生活上の情報を十分に得ることができない、デンマーク在住十年以上の移民と難民の女性がプログラムの対象となった。実際に参加したのは正規のデンマーク語教育を受けたことのない二五歳から五〇歳までの女性である。プログラム参加者は、デンマーク語の新聞を読んで自由討論を行ない、司書が全体の進行役を務める。デンマーク語新聞の閲覧経験がほとんどない参加者が、ワークショップを通じてデンマーク社会への興味と理解を深めることがプログラムの目的である。

同種のプログラムは他の図書館でも行われ、退職した図書館利用者がボランティアとして、移民の新聞閲覧を支援している。図書館サービスにボランティアがかかわることがほとんどないデンマークではめずらしい事例といえる。

〔事例3 オーフス公共図書館〕

デンマーク第二の都市オーフス公共図書館では移民が多く住むゲレロブ分館で、ユニークなサービスが行われている。図書館では一九九〇年代半ばから、市民の情報技術利用にかかわる援助に着手した。ゲレロブ分館では、移民への情報技術のスキルアップのための支援活動に加えて、「職業コーナー」を設け、雇用促進のための積極的なサポートを行ってきた。

さらに分館では住民の社会参加と公共サービスの向上を目指す、コミュニティ・プロジェクトを立ち上げた。プロジェクトでは図書館がコミュニティの様々な機関と連携して、学習支援や情報技術を取得するためのインフォーマルな学習の場を提供したり、生活相談に応じる機会を設けている。

●マイノリティ住民へのサービスを支える制度

ここに紹介した三つの図書館が行っているサービスはいずれも、マイノリティに対する先進的サービスの事例と呼べるだろう。しかしながらデンマークにおいてマイノリティへの情報利用支援は、基本的なサービスでありどこの図書館でも実施している。次に、デンマークの多文化図書館サービスを支える機関と制度を紹介したい。

北欧に住むエスニック・マイノリティの出身地は百カ国以上に及ぶ。公共図書館では原則としてコミュニティの居住者の人口構成に合わせて、マイノリティ住民のための母語資料の収集を行うものの、各図書館が居住者全員の母語資料を収集することは困難である。

そうした資料面での課題を克服するために、北欧各国にはマイノリティへの図書館サービスを支援するセンターが存在

し、多言語資料の収集・提供に関して中心的な役割を担っている。各公共図書館はコミュニティのニーズに応じた多言語資料をセンターから借り、定期的にそれらの図書を入れ替えることよって、住民の読書要求に応じている。こうした機関なくして、北欧諸国のマイノリティへの図書館サービスは成立しないだろう。

デンマークには、「デンマーク統合図書館センター」というデンマーク全域の公共図書館のための資料センターがある。センターが担当するのは、①図書およびその他のメディアの公共図書館への貸出、②マイノリティ・サービスについての一般的なアドバイス、③資料の一括受入および目録サービスである。

センターは五〇言語からなる十三万四千点の資料を持つ。各国の代表的な文学や、各国の最新動向にかかわる資料、移民の子供が自らの出自となる文化を理解するための母語資料などを揃えている。



コペンハーゲン公共図書館

資料の貸借はすべて図書館を通じて行なわれ、利用者は近隣の図書館に出向いて資料を利用する。またセンターではマイノリティのために就労情報、教育、社会保障、文化・娯楽、政治に関する情報のリンク集も作成している。

●公共図書館とデンマークの統合政策

コミュニティにおけるマイノリティ住民とマジョリティ住民が共に社会を形成していくことは、デンマーク社会における最大の政治的・社会的課題となっており、公共図書館は、マジョリティ住民とマイノリティ住民の統合を支援する点で、明確な責任を果たすことが求められている。また文化的・民族的に異なる背景を持つ人びとが自由に集うことができる場所という点で、コミュニティの公共図書館という場所の持つ意味は、きわめて重要だと考えられている。

先進的なサービスを展開するデンマークの図書館だが、課題もまた数多く指摘されている。マイノリティ住民は図書館に長時間滞在するが、資料の貸借は少なく図書館の機能を十分に利用しているとは言えない。一方、マジョリティは資料の貸借を目的に図書館を訪れ、短時間でそこを去ってしまう。同じ空間を利用し

ていながらコミュニケーションがほとんどみられないのである。公共図書館は統合の理念と実践との距離を埋めるために、両者の相互コミュニケーションの可能性を探るための多様なサービスを展開している。

北欧では住民の情報アクセスへの機会の平等を確保することが図書館サービスの基点であり、マイノリティ住民へのサービスもこの理念に基づいて行われている。デンマークの場合、四〇年間にわたるサービスの蓄積を基盤に、統合という目標を理念として掲げつつ、多文化社会図書館サービスの確立を目指しているのである。

(筑波大学図書館情報メディア研究科)

図書館情報学)